

健康文化

現代人とは誰

高田 健三

人間科学の永遠のテーマである「人はどこから来て、今どこにいて、将来はどこに行くのか」については、科学文明の行き過ぎの反省もあって、いろいろな人達が興味のある本を書いている。今を生きる「現代人」にとって、「今」を確認するためには、どうしても過去を知る必要があるからである。それほどかしこまった理由ではなくても、人は誰しも歴史を振り返って未来を占いたいのであろう。数年前、九州の吉野ヶ里遺跡の発見など、最近はちょっとした考古学ブームのようである。それこそ日本人はどこから来て、いつ頃、どのようにして日本文明を創り出してきたのかは、誰しも気になるところである。日本列島はユーラシア大陸の東端に位置しているから、移住して来たコースは北・西・南からといろいろあるにせよ、アジア大陸を經由して来た人類の終着地であるらしい。いろいろな研究からすると、日本列島に我々の祖先が住み着いたのは2～3万年前であるらしいというから、人類誕生500万年の壮大なドラマからすると、日本人の系譜の始まりはつい先頃の話なのである。それにしても、人類発祥の地ははるか彼方のアフリカ大陸大地溝帯だとされているから、はるばるとやって来たものである。日本人の仲間のモンゴロイドは1万4000年前更にベーリング海峡から北米大陸に渡り、それから数千年後には、はやばやと南米大陸南端まで進出していったというから、母なるアフリカの大地から近距離の地にとどまったヨーロッパ、西アジアの人たちに比べると、フロンティアスピリット旺盛な人たちだったのであろう。

そんな彼らの祖先もなぜか初めの400万年はアフリカ大陸にとどまっていたらしい。それが100万年前、火を使い始めたといわれる原人(ホモ・エレクトス)の時になって、ついに“出アフリカ”を果たし、それ以後、アジア、ヨーロッパに進出し、それぞれの地域の現代人(ホモ・サピエンス)に進化したというのが、今までの一応の定説になっていた。ところが最近になって、分子遺伝学の方法を用いた研究が、全く異なった結果を出したことで、人類進化、民族形成の図式に大きな議論が巻き起こっている。細胞のミトコンドリアのDNAを世界各地の人について分析した結果、各地域の現代人の祖先は、アフリカ大陸にいる

間にそれぞれに進化した後、20万年前頃になってアフリカを出たとする可能性が示唆されたからである。そうなる和我々日本人もついこの間まで、ヨーロッパ人やアフリカ人と一緒にアフリカの大地でくらしていたことになる。そうだとすれば正にその頃の地球は、「人間家族」の世界だったということである。

現在、世界には約3000種類の言語があるというが、そんなに多くなった必然性は何だったのであろうか。文化人類学的には面白い研究対象であろうが、一方風刺の得意なブリューゲルの絵にもあるバベルの塔の神話によれば、大洪水以後繁栄を許されたノアの子孫(現代人)の傲慢を見て取った神は、懲らしめにくつもの異なった言葉を彼らに与えたがため、仲間内の意思の疎通を欠くようになって、塔建設の野望は未完に終わったという。かくして多言語、多民族の形成につながったとするが、今の世界の状勢を眺めると、神の怒りは現在も続いているとしか思えない。おかげで私などは海外へ出かける度に、英語圏はともかくも、とくに欧州では不便を感じることが暫々である。

人類が「ことば」をもったのは少なくとも50~60万年以前という見方があるが、文字と違って形として残らないので証明のしようがない。聖書には「ことばは神とともにあった」と記されているというから、はるか昔の神話時代であったろうと想像される。しかし人類が進化するにつれ社会性を持ってくると、記憶を残すことや、遠隔地の人に意思を伝える方法が必要になって、はじめに絵を用いることを考え出したのであろうといわれている。文字は知らなければ意味がないし、学ばなければ通用しないが、絵は“写実物”であるから、上手、下手に関係なく、見るだけで分かるからである。絵に比べると文字は約束ごとが沢山必要で、そのためにずっと後になって考え出されたもので、その原形は5、6千年前頃らしい。文字は人類だけが持つ文明とはいっても、文字に悩まされる人は多いのではないだろうか。今は文書作成はワープロが主流になっているのでそんなことはないだろうが、私が子供の頃は、字の上手な人は出世するというをよく聞かされたものである。そんな時代に育ったにも拘わらず、私の字の下手さ加減は、自他ともに認めるほどのものである。だから出世しなかったのだろうと今では自分に言い聞かせている。私の字はなぜか一字一字が不定形で据わりも悪く、踊ったようになるのである。学生時代にある先生から、君の字は大変コミカルだねといわれ、ウィットの利いた表現だとは思っても、それ以来、文字劣等感につきまといわれている。それに字というものは年齢を取るほどに気になるもので、冠婚葬祭の折などに芳名帳なるものに署名するときなど、いまだに手先が強ばってしまう。名古屋大学にいた頃は余り字のことは気にならなかった。なぜならば、科学者には字の上手な人は殆どいないからであ

る(と私は勝手に思っていた)。ところが、文科系の今の大学では、仏教文化学科など大変に字の上手な先生が多く、ことあるごとに肩身の狭い思いをしている。それかあらぬか古代エジプト文明の講義のとき、動物などをシンボル化したヒエログリフ(絵文字)の話をする際に、当時の人たちは絵文字を書くときに、やはり上手、下手を気にしたであろうかと思ったりする。あれは見ていて楽しいものである。ところがある時、辞書のヒエログリフの項を見ると、最後に「難解な悪筆文字」とあったのには驚いた。恐らく、フランスの言語学者シャンポリオンが苦心惨憺、20年に近い月日をかけてやっと解いたほどの難解さであったことに由来するのであろうが、「悪筆」は余分ではないだろうかと思う。いずれにしても、私の字はコミカルかも知れないが、楽しさがないだけ、ヒエログリフにも劣るようである。

今を去る20万年前から4万年ほど前まで住んでいたネアンデルタール人(ホモ・ネアンデルタレンシス)は、何かと馴染みのある我々の祖先である。彼らは死者を葬る儀式を持った最初的人类といわれる。死者の体を、原野で摘み集めた草花で被い、その魂を慰める心を持っていた。現代人の意識のルーツを示唆する最も古い証拠と見られている。しかし、そういうネアンデルタール人も、石器は造れても、絵画や彫刻の能力には欠けていたらしい。花を美しいものと思うが故に死者に手向けたはずである。しかし、彼らは美しさを感じ得ても、その刺激を脳を通して再現する方法までは知らなかったのである。一方、フランスのドルドーニュ地方ラスコーの洞窟や、スペインのピレネー地方アルタミラの洞窟で、野牛や鹿などの躍動的な姿を赤、黄、褐色などの顔料で彩色を施した壁画が発見されたとき、石器時代の人類の感性に、人々は大きな驚きを感じたという。洞窟画の意味するものが、芸術(絵画)の原点なのか、絵文字なのか、あるいは宗教的なものなのかについては、いろいろ解釈はあるだろうが、いずれにしても、2~3万年前もの昔、岩石を砕いてつくった顔料を獣脂で練った絵具が使われていることに、当時の人類の創造力のすばらしさが窺える。暗闇の洞窟の中で松明の明かりを頼りに描いたであろう絵が数万年の時空を超えて現代人にも感動を与えうるということは、絵は視覚を通して伝わる人類共通の感性の産物だからであろう。古代ローマの詩人であり演劇家でもあったホラチウスは、「絵画は言葉のない詩である」と言ったというが、名言とはこういうものかと思う。養老孟司元東大教授の考えでは、言語、数学、宗教、芸術、科学などのシンボル体系を持つようになったのが「現代人」ということになる。すると石器時代に洞窟画を描いたのは明らかに現代人の資格を持つ人たちである。その後の人類の進化は目覚ましく、文字というシンボル体系を組み立てた

ことで、外界から獲得した情報の蓄積、その伝達を可能にしてからは、現代文明の創出に向けて、ひた走ってきた観がある。生物学的に見て人間はこれ以上容易に進化しない域まで来ているという。一方、人類進化の歴史の99.9%は、未開の大自然の中で自然選択を受けてきたという時間の長さを考えると、急激に破壊をされ汚染された環境に適合した遺伝子型を人類が獲得するには、今後何百世代かかるか予想もできないという。汚染環境の中で消滅するのが先か、それに適合した遺伝子型を獲得するのが先か、その辺りで「人は将来どこへ行くのか」、少し見えてきそうである。前期のゼミはここまでで終わった。

今年の春、機会があつて、教員資格取得のための現場実習、いわゆる教育実習の視察にある中学校におもむいたときのことである。本学4年生のA君の、社会科を担当して2週間の模擬授業の成果を問う研究発表の日であった。彼は縄文時代と弥生時代の社会環境と生活内容を比較し、その仕上げとして弥生時代がよりよき生活であったということに生徒の結論を導くつもりであった。さて、最後の一時間の締めくくりの授業も終えて、生徒たちに意見を聞くことになった。彼のつくった授業マニュアルの最後の項に、生徒の大部分は、弥生時代がよいと考えるだろうとの予測が記してあった。ところがどちらがよいか挙手で見たところ、半数以上の生徒が縄文時代の方をよいとする結果になった。A君は2週間の授業の自信があつたらしく、これにはいささか狼狽したらしく、困惑の表情もありありと見えた。私の他に、校長先生、社会科の先生、それに他の大学からの実習生3~4人も見ている中であるからもっともなことである。縄文賛成派の意見は、自然環境の中で自由があつた、弥生時代は農耕が始まって食料が保証されても指導者に支配されるのはいやだ、争いで他人を傷つけたりすることはよくないなどであった。教員室に戻ってからA君は授業の失敗を嘆くことしきりであった。社会科の先生は、2週間と時間も短いことだとなぐさめたり、あれだけの情報を知った上で、縄文時代がよいとする考え方はむしろ面白いのではないかなどと議論に花が咲いた。中学生たちのナイーブなものの考え方が、将来どのように発展するのか、楽しみにしてよいのか、心配すべきか、これも「人の行く先」に係わりを持つことなのであろう。

(同朋大学教授・名古屋大学名誉教授)